

【俳句部門】

▽最優秀賞

ボクシング場サンドバッグにも汗

玉名工2年 山田 夢翔

【評】まず、汗が飛び散つて、音と映像がリアル。この躍動する力が、つい五七五の調べを越えて、「ボクシング場」「サンドバッグ」「にも汗」と、「句またがり」と字足らずをもたらし、かえつて力強い一句になつた。パンチが炸裂し汗が飛び散る、パワーあふれる青春讃歌である。（岩岡）

▽優秀賞

人混みに似た顔ひとつ花曇り

文徳2年 村上 愛梨

【評】想像力を掻き立てるドラマチックな一句。季語「花曇り」が効いています。人混みに見つけた顔は、誰に似ているのでしょうか。答えは、読み手に委ねられます。（西口）

風鈴の鳴るたび遠くなる記憶

球磨工3年 柳原 吏旺

【評】大切な記憶を呼び覚ます優しい風。風鈴の音が消えては遠ざかっていく記憶。それは、儂く美しいものに違いありません。夏の持つ静かな時の流れを捉えました。（西口）

思い出と残暑を置いた虚無の部屋

熊本工2年 清水 貴行

【評】ちょっとと理詰めで、若々しい。「虚無の部屋」に「思い出」と「残暑」を置いて、オシャレ。観念的に見えて、どこか実感があるので。（岩岡）

海面にたゆたう夏は陽の鱗

盲学校1年 井芹 歩夢

【評】海面に揺蕩う夏の陽を感じとつた作者は、夏が揺蕩つていると表すのです。さらに揺れながら煌めく海面を、夏の陽の鱗だというのです。独自の美しい世界観。（西口）

夏祭り暴れにいくぞ友達と

球磨工2年 福永 瑞獅吾

【評】なかなか物騒な句だが、元気あふれる、青春のエネルギーのようなものが手掴みで表現されていて、いかにも季語の「夏祭り」にピッタリ。最優秀賞の句にも近いし、努力賞の次の句にも似た感覚。（岩岡）

*夏来るフェスが私を呼んでいる（中村ひより）

▽入選

大森繼承（文徳1年）島田杢（熊本農3年）杉野吏衣子（専大熊本2年）石坂優良（尚絅2年）横田龍騎（熊本工3年）

▽努力賞

原口太士朗（熊本工3年）森山直哉（玉名工1年）園田留梨（宇土1年）中村ひより（球磨中央1年）桑原翼（球磨中央1年）森山朝喜（球磨中央2年）東冬馬（球磨中央2年）武原椿樹（芦北3年）住永大河（熊本2年）原田夏歩（尚絅1年）

【総評】

今回も県内の多方面から多様な作品が送られて來た。高校生らしい喜怒哀楽が垣間見える作品群は、本当にほほえましく楽しく、実感あふれる句が多く、ああ俳句はこんなに自由でのびやかでいいのだと教えられる。感動が眞実であれば、技法は自由でいい。単純・率直・明快な句が、俳句らしく若い人らしくていい。その点で、今年もたくさん学ばせていただいた。

短評を書いた最優秀賞と優秀賞以外の受賞作についてふれると、優秀賞の「人混みに」の句は、「花曇り」らしく幻想的で「物語」がある。「風鈴の」の句は、丁寧な写生で、うまい。「海面に」の句は、「夏は陽の鱗」ととらえた感覚が鋭い。造形の力がある。（岩岡）

俳句には余白がたつ。ふりあります。たつたの十七音。けれども、その十七音の中に想いも、季節の匂いも、心の揺れも入れることができます。俳句とは、心が動いた瞬間を切り取る表現です。一瞬の感情を閉じ込めたドラマとも言えます。

「ボクシング場サンドバッグにも汗」には、くどくどとした説明がありません。繰り返される句またがりは作者の呼吸。汗という季語を最後に置いただけ。そこが面白い。ぶつと切って放り出すことでその場の状況、空気、音や匂い、その場にいた人の心情までも自由に想像させるのです。俳句は短い。それこそが、そのまま表現上の強みになる、ということを証明しています。

特別な出来事でなくてもいい。ふと立ち止まって見上げた空の色、風鈴の音、波打ち際の光、百合の香り・・・。俳句は、小さな一瞬を丁寧に掬い取るための器。きっとあなたが今を生きているという証を留め、未来に届けてくれるでしょう。（西口）

【短歌部門】

▽最優秀賞

寒い冬ハウスへ向かうわたしたち育つ命に引き寄せられて

熊本農3年 恒松 遼

【評】目標を持つて学ぶ若者の姿がくつきりと表現されています。実習の時間なのでしょう。目的と時間を共有する仲間への信頼感と熱量がばつと伝わってきます。若い感情の自然な流露に共感します。（塚本）

▽優秀賞

将来へはばたく翼手に入れた卒業式の後の静寂

熊本2年 宮本 鏡子

【評】作者は二年生なので、自身ではなく卒業生へのエールか。「羽ばたく翼手に入れた」に感心した（橋元）

雨音と土の匂いで思い出す姿は見えぬ梅雨の貴婦人

盲学校1年 井芹 歩夢

【評】「貴婦人」は紫陽花である。音と匂いで思い出したが姿は見えない。目の不自由な人ならではの秀作。（橋元）

君のこと書いてもいいの願いごと揺れる心と揺れる笹の葉

城北3年 林 恒河

【評】「揺れる」という言葉のリフレインが良く、内省の想いと眼前の物との波動のように感じることができます。言葉への怖れと嬉しさが巧みに表現されています。（塚本）

泣きながら土を握った最後の日負けた悔しさまだ熱をもつ

専大熊本1年 倉田 景透

【評】敗戦後の『甲子園の砂』は定番のようですが、これは『藤崎台の砂』でしょうか。若い意気を感じさせて余りある結句の「まだ熱をもつ」のフレーズです。（塚本）

夕暮れの風薰る午後麦の穂がささやく声と日差しの踊り

玉名工1年 福田虎之助

【評】夕方の麦畑の様子を擬人化して詠んだ楽しい作品。「風薰る午後」は「風薰る中」としたい。（橋元）

▽入選

入江美有（芦北2年）右田未羽（済々黌3年）上田理心（文徳2年）森島優美（阿蘇中央3年）古川藍媛（球磨工3年）

▽努力賞

上野獅恩（熊大附属特別支援3年）園川慧樹（宇土1年）大里結月（玉名工2年）家入煌汰（熊本工3年）田口華樓櫛（小川工1年）針尾結子（大津2年）白川陽菜（文徳1年）川邊悠斗（球磨中央2年）合志瑚把留（菊池女子2年）村山華音（人吉高五木分校3年）

【総評】

応募作品は半分近く減少したが、作品のレベルは数段上がった。これは、全校生応募などがなくなり、自信のある生徒の投稿が主になつたためである。それにより校外生活に日常生活を題材にした作品が増えたのである。昨年までは登下校や花火大会、お祭り（今年も多少はあつたが）などに限られていた。新しい題材には花や風景、家族との関係など多様性が見られた。最優秀賞作品のような校内の出来事を詠んだ優れた作品も少なくなかつた。また、いつもながら

の淡い恋心の歌にも微笑ましい作品があつた。

ところで、この公徳文芸賞は今年で二十二回を数える。「短歌甲子園」と呼ばれる岩手の全国高校短歌大会はこの夏で二十回だつた。こちらが一年早いのである。この賞の伝統に改めて敬意を表したい。（橋元）

この公徳文芸賞は二十二回を迎えた。形式は違いますが岩手県の短歌甲子園は二十回、宮崎県の牧水短歌甲子園は十五回ですから、回を重ねるものとも先端の高校生の文芸賞と言えるでしょう。しかも短歌をはじめ四部門を網羅しているのも他に例を見ません。

ところで、今年は二人の選考員の予選の作品に重複はあまりありませんでした。それだけ粒が揃つた作品が多く、最終選出にはより慎重を要した次第です。

作り手の心の動きが作品化されたとき、受け止める側の心もまた動きます。たんなる思いではなく、たんなる空想でなく、日常の現実があつてそれで発想された作品は読む者的心に届きます。日常と自己をていねいに見つめた作品が多く、若い世代への信頼を深めることができたことを感謝したいと思います。（塚本）

【自由詩部門】

▽最優秀賞

「砂漠」

砂地が広がっている
時計の針が木枯らしを運ぶ
黒板には一つの汚れもないようで

砂地が広がっている
人の気配はとうに死んで
外に吸われたままらしい

砂地が広がっている
真白いプリントが
眩む僕らを嗤うのは
勇気の一粒もないせいだ

砂地が広がっている
忘れたくない声が
優しくサツシを叩くので
僕は小さく口を開いた

砂地が湿つていく
こんなにひどく痛いのに

夢な訳がないんだよ

砂色の机を撫でながら

ここは僕らの教室だ

熊本2年 神谷 紅葉

【評】みんな一緒にいるはずの教室が寂寥とした砂地のように荒み、一人ひとりが陥り加減で孤独に苛まれている様子が思い浮かびます。難解な漢字を使用しない、高度な比喩表現に圧倒されました。最後の2行も秀逸です。（深町）

▽優秀賞

「日常を愛す」

僕ら出会い別れを繰り返し背を伸ばす
思い出振り返り笑い踵を上げる
熟れた果実の実を見つからぬようにと
努力の足跡消さずに残したあの日
だれかに見せたい明日の張る心を

僕達は

生まれ育ち憩う場所でまた足を伸ばす
生きる意味を探し間違え振り返ってみる
どこにもなかつた繋がりを見つけ喜びにしてみる
色のないこの世界で生き延びようとしてみる

目で見てみないと
愛されていないと

毎日が擦り減るからそばに居たい
見えている景色も
感じている鼓動も
消えないようにとまた守つてゆく日々

笑える日ばかりじゃないけれど
泣きたい理由も思い出せなくて
ゆつくりでも歩いてゆくことが
誰かの明日に繋がるなら
それでいい

望んだはずの日常を嫌いにならないように
その目の内を 日常の中での
一つづつ 愛してみる

【評】詩の題名に、作者の哲学が感じとれる。一連と一連が特にいい。「背を伸ばす」「踵を上げる」等の詩句が「色のない世界」で生き延びる知恵のようだ。（内田）

「拝啓、御前へ」

なんだその目は
その目は光ではなかつたのか
よくもそんな目で
久しぶりと言えたものだ

なんだその今は
その今は夢ではないだろうに
よくもそんな今で
かつての友と話せたものだ

なんだその顔は
その顔は仲間のものではない
よくもそんな顔で
会えてうれしいと泣けたものだ

なんだこの私は
それは誇りではなかつたのか
こんな今を受け入れて
かつての夢を捨てて
こんな詩を詠んで
よくも助けを求めたものだ

熊本2年 住永 大河

【評】あるべき姿になれない作者のもどかしい心情が伝わってきました。本音と建前を無意識に使い分けられる器用さに戸惑いもあるのでしょうか。リズミカルな書き方には無駄がなく、タイトルにも工夫が感じられます。（深町）

「正解」

毎日問い合わせをする

簡単な日もあれば
難しい日もあつて
一人で解決できる日もあれば

一人では答えにたどり着けない日もあって
出した答えに満足する日もあれば
後悔する日もあつて

今日正解だと思った答えが
次の日には間違いだと思うかもしない
だけどいつかの自分が笑つていれば
その時はどんな答えも正解だつたときつと思える
そんな日が来るのがどれだけ先だとしても
私は毎日自分の問いと向き合つていて

済々齋3年 村上 菜月

【評】読み進むうちに、問いかと答え合わせから、逃げないという「正解」が必ずと浮き上がつてくる。例えどんなアポリアであつても、向き合う矜持と共に。（内田）

「忘れじの花」

春のさくらは 風にあらがえず
きみと笑つた記憶ごと 空へ散つた
たなごころにすがる花びらは
ふれた瞬間消えていった

夏の紫陽花は 風をまとい
心も変われと つげるけれど
私の想いだけは
雨にとけずにそこにのこつた

秋の彼岸花は 風にふれ
川辺で孤独を照らしつづける
すれ違つたひとみの温度も
未練に変わるので知りながら

冬の椿は 風を抱き
静かに落ちる瞬間さえも美しく
その優さにふれたとき
君のかげだけが 遠ざかつた

風に靡く 紫苑が咲く
しづかに揺れながら囁いた

【評】四季の花に自分の心情をなぞらえた詩で、届かない君への想いに切なさ

尚絅3年 村岡 愛莉

が感じられました。繊細な恋心は、美しくも儂い花のようにならつていくようで
す。自分の想いと自然の様子を交錯させる表現が素晴らしいです。（深町）

「ひこうき雲」

夕暮れ時

ゴオー、と音がした

空を見上げると

真っ白い、飛行機

かすかにひこうき雲をなびかせながら
太陽に向かって真っ直ぐに

まるで自分の進むべき道に
迷いが無いかのように

真っ直ぐに

ふと思う

私は今、どこを歩き、
どこに向かつて進めばいいのだろう

正しい未来を
選べるだろうか

あの飛行機のように

選んだ未来を真っ直ぐに進めるだろうか

ひろいひろい グラデーションの空に
白く機体が輝いた

大丈夫、

風に乗つてそう聞こえた気がした
一番星が見え始める空に
道するべのよう

芦北1年 岩井 利央郁

【評】夕暮れは特別なひと時だ。ひこうき雲に自分の未来を重ねる。これ以上
はないわかりやすい表現であるが、終連が、一幅の名画のような詩になつてい
る。

▽入選

西坂太希（熊本2年）土屋瑠璃（芦北3年）青山日香（済々黌2年）井芹歩

夢（盲学校1年）税所心菜（南稜3年）

▽努力賞

右田未羽（済々黌3年）土屋藍莉（芦北2年）羽田瑠々花（芦北1年）加藤綾（済々黌1年）田口華樓欄（小川工1年）園田留梨（宇土1年）小野高幸

（南稜3年）後藤安奈（尚絅3年）立石永太（熊本はばたき高等支援1年）山

田翔瑛（芦北2年）

【総評】詩人工エマソンは「自然の光は、絶えず、心の中に流れ込んでくる。そして、われわれは心の中の光を忘れている」と言つた。皆さんの作品を読むことは、青春の心の光と対話できる得難い経験である。詩とは、元来評価できないものであり、あくまで選者の価値観によることはご容赦頂きたい。昨年に引き続き応募のあつた実力者には、自ずと厳しい評価になつたことも述べておきたい。毎年、見られていた戦争や災害等をテーマにした詩が、今年は姿を消したこと気に気づいた。戦禍も災害も、もはや日常になってしまったのかも知れない。その代わり自らの日常に、内省的で批判的な眼差しを向ける優れた詩が受けられた。今一つの特徴として、意表をつく感覚の短詩が幾遍もあつた。宝石の欠片のような言葉に、詩人の未知の可能性を予感した。今後に期待したい。詩とは特別なものではなく一部の専門家のものでもない。毎日を、懸命に生きることが詩心の原点だと改めて感じた。（内田）

詩を書く行為は、孤独な作業だという。「楽しくて仕方がない」という気持ちで書く人は少なかろう。では、なぜ書くのか。それは、「自分らしさを表現できるから」も理由の一つであろうが、突き詰めると「生きていることを実感できるから」ではないか。こう思えたのは、今回寄せられた作品の多くに、自己の内面を深く見つめる様子がうかがえたからである。これまで「多様性」を訴える詩が散見されたが、今回は「生きづらさ」が垣間見える詩も多かつた。それでも好感が持てるのは、やはり高校生という感性が瑞々しいからであろう。なかには既に一定の技量を有し、軽々と詩境を越えてゆくような作品もあつた。理論や形式にとらわれず、伸びやかに表現する作品もあつた。短文ながら、詩情がきらりと光る作品もあつた。しかし、ほとんどの作者は無自覚で書いていることだろう。産で殊勝なのもまた、高校生という書き手の魅力である。今回の詩作を機に、これからもどんどんと書いてほしい。そして、自分という存在の大切さを感じてほしい。（深町）

【肥後狂句部門】

▽最優秀賞

良か思い出 シヤツに一滴墨の痕

城北3年 江藤 愛梨

【評】シャツについた墨の痕から、書道をがんばったこと、入賞したこと、書道を通じた友情等、様々な良い思い出を読み手に想像させてくれる句だ。「一滴」が作者の思い出をより深いものにした。言葉選びの巧みさが良い句に仕上

げた。（鳴神）

▽優秀賞

良か思い出 沈む夕日へ漕ぐ。ペダル

熊本工2年 泉 瑛心

【評】一日を一生懸命に過ごし、色々な思いを抱いて自転車を漕いだ帰り道。夕日に向かう。ペダルは重かつた日も、軽やかだった日もあつただろう。全てが作者の青春。（山野）

夢がいっぱい 母の支えが背中押す

城北3年 姫野 悠翔

【評】どんな夢も自分一人では叶えることはできない。作者も良く分かっている。母親とともに夢に向かう姿、母親との良好な関係がこの句から読み取れる。応援したくなる句である。（鳴神）

さあこれから やる気スイッチどこだろう

球磨中央3年 馬場 遼斗

【評】やらなければならない時が来た。分かってはいるがなかなか動き出せない。やる気スイッチという他力に自分を委ねる人間の弱さをユーモラスに表現できた。（鳴神）

良か思い出 祖母のぬくもり膝の上

宇土1年 中村 文香

【評】おばあちゃん子の祖母への思いが素直に出て温かい句になった。高校生になった今、優しいおばあちゃんの膝の上に抱っこされたことを思い出し、懐かしむ様子が良く表れている。（鳴神）

良か思い出 セミの鳴き声鳴る弦音

球磨中央3年 竹田 閃維

【評】静寂の中の2つの「音」だけで、夏の弓道場の情景を美しく詠みあげた。わずか12文字から、弓を引く時の集中や緊張感がありありと伝わってくる。（山野）

▽入選

辻本勇馬（熊本工3年）鹿本英寿（熊本はばたき高等支援1年）井野ゆめか（熊本商2年）園田留梨（宇土1年）鳴海未来（城北3年）

▽努力賞

園田南波（球磨工3年）伊藤杏朱理（城北3年）犬童一秀（黒石原支援3年）田崎夕愛（玉名工2年）前田望希（芦北3年）後藤桃果（熊本工2年）志賀ひなた（阿蘇中央3年）村上晃郎（熊本工3年）早川朋希（熊本はばたき高等支援3年）丸目一颯（熊本商2年）

【総評】

応募数が増え続いていることに感謝しています。高校生らしい若さ溢れる句に出会い、選考に大変苦労しました。入選句には部活動、友情、恋愛などの高校生活での体験を詠んだものや受験を始めとした将来への夢や期待を詠んだものが多くありました。実体験を句にすること、自分の心情を素直に表現するとの大事さを改めて感じました。

句を作る上で大事なことをあげてみます。先ず、「句から想像させること」。事実を羅列するだけでは良い句にはなりません。句の背景を想像させてください。そのためには言葉選びが一つのポイントです。比喩や間接表現が使えばさらに良いでしょう。二つ目は「句から映像や絵を浮かばせること」。これも言葉選びや素材選びがポイントになります。最後に注意したいのは「勝手に言葉を作らないこと」。辞書に無かつたり、周りでだけ流行つたりしていふ言葉は使わないことです。読み手あつての肥後狂句であることをわすれてはいけません。では、来年も素晴らしい句に出会えることを期待しています。

（鳴神）

昨年以上に多くの句が集まり、沢山の高校生が狂句に親しんでくれたことを嬉しく思います。今回は七・五のリズムが良い句が多かったと感じました。

「良か思い出」の笠では、部活や花火、友達と遊んだことなど、充実した思い出を沢山の句にしてくれました。私も一緒に参加しているような気持ちになりました。「さあこれから」の笠では将来の希望や不安を素直に詠んでくれた中、未来という言葉の多さが印象的でした。

多くの句が、自分一人ではなく、家族や友達、仲間などの「誰か」の存在を感じさせる内容でした。高校生は誰かとの繋がりを大切にしながら生きているということ、それをたつた12文字で選者に感じさせてくれた皆さん之力はすごいなと思います。

肥後狂句は、この短さで自分の思いを表現することができます。皆さんは高校生にして狂句の作り方を知り、作品を作ってくれました。ぜひ今後の人生でも、自分の思いを伝えたいときに狂句を詠んでみてください。（山野）